ポケダン伝～時と闇を束ねる光～

神戸ルイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケダン伝～時と闇を束ねる光～

【Ｎコード】

Ｎ２４３３Ｚ

【作者名】

神戸ルイ

【あらすじ】

ピカチュウになってしまった人間（バカ）と探検隊になりたいポケモン（Ｓ）が出会った時、歴史は大きな変化を見せる・・・のだろうか？

プロローグ～　TENOR　SIDE～

夕方から降り始めた雨は、夜になってさらに激しさを増して降り続いていた。
『ピシャーン！！』
突然鳴り響いた雷鳴に、私は思わず身を縮める。
稲光が、私が身を潜めているサメハダ岩の中を一瞬照らした。
鼓動が早くなっていくのが、はっきりとわかる。
――落ち着きなさい、テナー。
自分に言い聞かせながら、ゆっくり深呼吸する。
――そんな調子で・・・
今まで何回も頭をよぎった思いがまた、私に問い掛ける。
――探検隊になれるとでも思ってるの？

「なれるかどうかじゃない・・・」

ともすればくじけてしまいそうな心を立て直すために、声にだして再確認する。
「私は・・・・探検隊になる」
雨はまだ、降り止む様子がなかった。

プロローグ～　TENOR　SIDE～（後書き）

テナー「なにこれ？」
作者「まずはテナー　の一人称から始めようと思って」
テナー「こんなグダグダなやつで進められると思ってんの？」
作者「大丈夫。次から三人称の予定だから」
テナー「そういう問題じゃない！」

シーン1　出会い（前書き）

念の為言っておきますが、プロローグで出てきた『私』とこれから出てくるゼニガメは同一人物です。

シーン1　出会い

高台の上、プクリンをかたどった建物の前に一匹のゼニガメが立ち尽くしていた。
その精悍な赤い両目は何かを思案しているらしく、目の前にそびえたつそれを軽く睨んで動かない。
やがて、決心がついたようにおもむろに一歩を踏み出した。
『ポケモン発見！！ポケモン発見！！』
突然、足下から響いてきた声に、ゼニガメは思わず身をひいてしまう。
「はぁ・・・」
溜め息をつきながら、肩から下げた鞄から何やら模様が刻まれた石を取り出した。
「やっぱり、これ持って来ただけじゃだめね・・・」
「いいもの持ってんじゃねぇか。お嬢ちゃん」
背後から声をかけられ、振り返るとドガースとズバットがニヤニヤ笑っていた。
「何の用ですか？」
ゼニガメの目が、訝しげに細くなる。
「それ、俺達がもらってやるよ」
「いらないといった覚えはないですし、あなた方にあげるとでも思ってるんですか？」
「思っちゃいねぇよ」
そう言いながら、ズバットはゼニガメに体当たりする。
「お前が渡さないのなら、奪うまでだ」
「うっ！」
ゼニガメの手から転がり落ちた石を、ドガースがキャッチする。
「リック！これ相当なお宝だぞ！」
「よし。ずらかるぞ、ダンプ」

リックと呼ばれたズバットが、ダンプという名らしいドガースの元にたどり着くと、二匹は高台を駆け降りていった。最も彼らには足がないため、『駆ける』というのは正確ではないが。
「ちょっと、待ちなさい！」
体勢を立て直したゼニガメも、彼らを追って駆け降りていった。

「逃げ足の速い奴らね・・」
ゼニガメは海岸までリックたちを追いかけたものの、砂浜で見失ってしまった。
「ここまで逃げたってことは、多分『海岸の洞窟』に・・・うん？」
砂浜に走らせた視線が、ある一点で止まる。
黄色い何かが、砂浜に置かれていた。
「あれって・・・」
目を細めて見ると、それはものではなく一匹のポケモン――ピカチュウだとわかった。
「ちょっと！」
慌てて駆け寄り、声をかける。
「大丈夫ですか？」
「ん・・・」
声が聞こえたらしく、ピカチュウはゆっくりと目を開けた。
焦点が定まらないのか、辺りをきょろきょろと見回す。
「ここは？」
「海岸です。あなたはここに倒れていたんですよ。」
「そうなんだ・・・って！」
「どうしたんですか？」
「何で・・何でゼニガメが喋ってるの？」
「はい？」
突然突拍子も無いことを言い出したピカチュウの顔を、ゼニガメは

まじまじと見つめた。
そこには、驚愕の表情しかなく、からっかってる様子は無い。
「当然でしょう？あなたはピカチュウなんだから。」
「何言ってんの？私は・・・」
そのポケモンは、はっきりといった。
「私は、人間だよ？」

シーン1　出会い（後書き）

テナー　「短っ！ここで切んの？」
ピカチュウ「後、私の名前もでてないよ。サブキャラのは出したのに」
作者　「ごめん体力の限界。次回書くからね」
テナー　「どうだか。あなたの約束はあてにならないから」
作者　「（無視して）また次回〜」

シーン2　名前（前書き）

今回、いよいよメインキャラ二匹の名前が明らかになります。
テナー「だからってこのタイトルは露骨過ぎるでしょう！」

シーン2　名前

「・・・人間？あなたが？」
ややあって、ゼニガメが口を開いた。
「そうだよ。決まってんじゃん」
「どこからどうみても、ピカチュウにしか見えませんけど？」
「？！」
ピカチュウは不意に自分の身体を見回した。短めの黄色い手足、先端が丸みを帯びた稲妻形の尻尾――。
「何これ！？どうなってるの？」
「もしかして、私のこと騙そうとか考えてるんですか？」
一応尋ねてはみたものの先ほどまでの様子からみて、そうとは考え難かった。案の定、
「滅相もない！信じて！本当に人間なのっ！」
耳が千切れ飛ぶのではないかと心配になるほど首を振って否定する。
「じゃあ、名前は？」
「エリス。エリス＝ベライトだよ」
「エリスさんですね。年は？」
「えぇっと・・・・あれ？」
エリスは頭に手をやり、目をきつく閉じる。そして、愕然とした様子で呻いた。
「分かんない・・・。自分の名前以外、何にも思い出せない！」
「それって、もしかして記憶喪失？」
「どうしよう・・・どうして私・・・」
混乱状態に陥ったエリス。その一方でゼニガメは自分が砂浜に来た本来の目的を思い出していた。
――ここでもたもたしてたら、あいつらに追いつけなくなる。この子のことも心配だけど、今は・・・
「落ち着いて聞いて下さい。エリスさん」

「何？」
「私はテナーといいます。あなたが困っているのは分かりました。私で良ければ力になります」
「本当に？」
エリスの顔が、安堵して緩む。だが次の瞬間
「ただ、しばらくここで待っていていて下さい。」
「え？」
「すぐに戻ってきますので」
そう言いながら、テナーは『海岸の洞窟』へ走り去っていった。
「ちょ、ちょっと待っ」
背後からエリスの声と、
『ドシン！』
派手な転倒音が聞こえて来たが、テナーは無視した。

シーン2　名前（後書き）

エリス「また変なとこで切ったね」
作者「これからもこんなかんじの小粒で行きます」
テナー「この調子じゃ、いつ第一章が終わるんだか」

シーン3　石つぶて（前書き）

長かった・・・これ書くのに1日使った・・・

シーン3　石つぶて

『海岸の洞窟』の中は湿っぽく、薄暗かった。奥へと歩みを進めながら、テナーは頭の中で作戦を組み立てる。
――水タイプが多そうだから、まずは石礫で先制攻撃する。もし至近距離まできたら・・・
「誰か～」
不意に、先ほど出会ったポケモンの声が聞こえてきた。
「気のせいよね・・」
彼女には砂浜で待っておくよう言ってある。気の迷いからくる幻聴だろう。そう納得しようとしたら、
「助けて～テナーさ～ん」
気の迷いに名指しで呼ばれた。しかも、前より近くにいるように聞こえる。というより近くにいる。
「待ってろっていったのに・・」
軽く舌打ちすると、テナーは声のする方向へ駆け戻った。

「何やってるんですか・・」
声の主はやはりエリスで、入口からすぐの開けた場所で短い二本の足で危なっかしく走りまわっていた。そして、彼女の後ろには目を赤く光らせたカラナクシがいる。
「このカラナクシが追いかけ回してくるの～話しかけてるのに通じないしさぁ」
逃げているエリスはすでに涙目である。
「当たり前でしょう？野性ポケモンなんだから」
「ヤセイポケモンって何？」
――そこから説明がいるの？
そんな言葉が喉まで出かかったが、踏み止どまって違う質問をする。
「というより、相手は水タイプなんだから、電気技使えばいいじゃ

ないですか」
「出し方分かんないから！お願いだから助けて！」
――今、こいつに何をいっても無駄だ。
そう判断したテナーは、攻撃方法を考えることに意識を切り替えた。
――カラナクシの特性は確か『呼び水』。水による攻撃は無効。『体当たり』はこの状況下では論外。それなら・・・
鞄から小石を取り出し、身構えた。
カラナクシが走る少し前を狙って、腕を大きく振るう。
「せいっ！」
勢いよく放たれた小石は頭に命中した。
「ギャアッ！」
怒り狂ったカラナクシはテナーめがけて攻撃を仕掛けようとするが、テナーは表情を変えずにもう一度石礫を食らわせた。
「グァァァ！」
断末魔の叫び声をあげ、カラナクシは気絶した。

「怖かったよぉ～」
「全く・・。何で来たの？」
ようやく落ち着いてきたエリスに、テナーは尋ねた。もはや敬語を使う気も失せたのか、タメ口になっている。
「だって、訳分かんないままいきなりおいていかれたから心細くなって」
「ここがどこだか分かってるの？」
「洞窟、かな？みたとこ」
「あのねぇ・・・」
あまりに脳天気なエリスに、テナーはややキレ気味にまくし立てる。
「ここは、『不思議のダンジョン』の一つなの！」
「フシギノダンジョン？何それ？」
「入るたびに地形が変化するし、野性化したポケモンが襲って来る危険な場所！最近は物騒な奴もうろうろしていたりするから、素人

がのこのこ入っていい場所じゃないの！！」
「じゃあ何でそんなところにテナーさんはのこのこ入っていったの？」
「それは・・・」
言葉に詰まったテナーをみて、エリスが続けた。
「さっきテナーさんが走ってどっか行っちゃった時、すごく真剣な顔してたの。だから、心配になって追いかけようと思って・・・何か、大切な用事があるんじゃないの？」
「別に、何だっていいでしょう？」
「私で良ければ、手伝うよ？」
「・・・あなたが？」
呟くように、テナーが問う。
「あ、やっぱりダメだよね。電気技もできないし何にも覚えてないし・・・」
「・・・」
「でも、さっき私のこと助けてくれたから、今は何か少しでもテナーさんの力になりたいの！」
「仕方ないわね・・」
テナーはしばらく頭を巡らせ、ゆっくりと答えを口にした。
「参考になるか分からないけど、技のおおよその出し方は歩きながら説明するわ。」
「え？それって・・」
「私と一緒にこの奥まで来てくれる？まぁどのみち、一度ダンジョンに入った以上は奥まで行かない限り出られないから。その辺で倒れられても困るし」
エリスは満面の笑みでこたえた。
「・・・うん！よろしく！！」

シーン3　石つぶて（後書き）

作者「後1・2話でおわる予定です」
エリス「次はいよいよ戦闘シーン！」
テナー「この馬鹿作者がそんなシーン書けるの？」
作者「自信ねぇ・・・」

シーン４　初陣

「技を出すためにはまずイメージすること、だね？」
「基本はそう。でもゼニガメとピカチュウじゃ体のつくりとか技のタイプが違うから、そこから先の細かいやり方は自分で覚えるしかないわね」
『海岸の洞窟』の中を、二匹分の足音と話し声が木霊する。
エリスは歩きながら、テナーから技のおおよその出し方を教わっていた。
「そうそう。体のつくりで思い出したけど、このピカチュウの足って走りにくいんだよね。短くて」
そう言いながら、エリスは自分の足元に目線を落とした。
「テナーさんを追いかけようとした時も、派手に転んじゃったし・・・早く慣れないと」
「別に、二本足で走ることに慣れなくてもいいと思うけど？」
「どういう意味？」
「普通、ピカチュウは走る時前足も使うわよ」
「あ・・・そっか。そうだよね」
「って、あの、エリスさん？」
テナーが話している間にエリスは四つん這いになっていた。そして、
「ちょっとやってみる」
トコトコと走りだした。
「うわぁ地面近い！でも走りやすい！」
「・・・別に今やれって言ってないから」
喜々として走り回るエリスをテナーは冷ややかな目で追った。
やがて、テナーの視界からエリスが消えた瞬間、
『ゴンッ』
鈍い衝突音がテナーの耳に入った。
「痛ぁっ！」

「全く・・」
半ば呆れながら音のした方向へ駆けよると、エリスが頭を抱えて蹲っていた。
「へへ・・・ちょっと調子に乗りすぎたかな」
「グルル・・・」
「？」
エリスが顔を上げると、目の前にピンクとブルーのポケモン――サニーゴがいた。さっきぶつかったのはどうやらこのサニーゴらしく、完全にエリスを敵として認識している。
「グラァッ！」
「つっ！」
サニーゴの『体当たり』を危うくかわし、エリスは2・3歩後ろに下がって間合いを取った。
「エリスさん！技！」
「分かった！えっと・・」
――まずはイメージだよね・・
エリスはサニーゴに電撃が落ちるところを脳裏に浮かべた。
『バチバチッ』
「！」
それに呼応するように、頬の赤い丸――電気袋に電気がたまっていく。
――で、こっから先はどうするんだっけ？
「グガァッ！」
体勢を立て直したサニーゴが、間合いを一気に詰める。
――何でもいいから早く！
腕でガードの構えをとりながら、エリスは体に力を込め、固く目を閉じた。
『ピシャーン！』
何かがほとばしる、初めての感覚が体を通り抜けるのと同時に、エリスから放たれた電撃がサニーゴを貫いた。

「ガ・・・」
「うわ・・・」
何が起こったのか分からない、と言いたげなエリスに、テナーが説明する。
「『電気ショック』。電気タイプの一番初歩の技ね」
「これが・・・ポケモンの力？」
「技の発動に若干のタイムラグがあるけど慣れれば大丈夫。・・・エリスさん？」
「面白い！！」
「は？」
「面白いよこれ！もう1回やってみる！」
「ま、待ちなさい！」
やたらテンションが上がってしまったエリスを、テナーは慌てて止めた。
「技は無尽蔵に出せる訳じゃないんだから、無駄遣いしないで」
「そうなの？」
「それに、無暗に攻撃すればいいんじゃないの。極力、野性ポケモンは傷つけないようにしないと・・・さて」
テナーは洞窟の奥に視線を向けた。
「もうすぐ奥につくはず・・・行くわよ。」

シーン４　初陣（後書き）

エリス「早くドガースのとこ行こうよ～」
テナー「私じゃなくて、細切れ遅筆の作者に言いなさい」
作者「うるさい！」

シーン5　対決

「そういえばさ、さっき聞きそびれたんだけど、ヤセイポケモンって何？」
サニーゴを倒した後のハイテンション状態からようやく落ち着いてきたエリスが聞く。
「野性のサニーゴを倒しておいて、まだ野性ポケモンが何か分かってなかったの？」
「さっきはぼやぼやしてたらこっちがやられそうだったから倒しただけだよ？」
「はぁ・・・」
テナーは今日何度目か分からない溜め息をついた。
「分かった。説明するわ。どこから始めたらいい？」
「最初から。私この世界のこと何も分かってないみたいだから」
――ここまでくると呆れるのもアホらしくなってくる・・
テナーは隣りを歩くあまりに無知であっけらかんとしたピカチュウに説明を始めた。
「今、この世界には大きく分けて2種類のポケモンがいるの。一つは私たちみたいに社会生活を送るポケモン。そしてもう一つが、さっきのサニーゴやカラナクシみたいな理性を失って狂暴化した野性ポケモン」
「リセイ？」
「話し合いでどうにかなる相手じゃないってこと」
「ふーん」
「野性ポケモンは自分のテリトリーを守る為だけに思考して動くから、近付く者には容赦なく攻撃する。相手を倒すか、見失うかするまでね」
「だから追いかけまわしてきたんだ！」
「もし野性ポケモンに遭遇したら、方法は2つ――さっきみたいに

技で撃退するか、奥まで逃げてやり過ごすかのどちらかよ」
「わかった」
「さて・・・」
テナーは不意に立ち止まり、辺りを見回した。
「どうしたの？」
エリスの言葉を無視して、テナーは暗がりに呼び掛ける。
「隠れてるのは分かってるわ。出てきなさいこそ泥」
「おやおや、『こそ泥』は少し失礼じゃないか？お嬢ちゃん」
テナーの睨む暗がりから、先ほど高台でテナーが出会った二匹――
リックとダンプが出て来た。
もちろん、エリスは彼らと初対面だ。
「誰？こいつらは」
「泥棒よ。私の宝物を盗んだ奴等」
「ほう、宝物？やっぱりあれはお宝なんだな？」
「思ったより値打ちがあるかもしれないな、ダンプ」
「あの石を返しなさい。今すぐ！」
「返して欲しければ、腕ずくで来るんだな！へへっ」
「ケッ、実力で取りに来てみろよ！」
「・・・エリスさん」
テナーはリック達の挑発より小さな声でそっと言った。
「私の手助けをしてくれる？」
「もちろん！」
同じように小さな声で、エリスが返事を返す。
「さっき助けてくれたお礼だよ」
「それじゃ、あなたはズバットをやって」
「やるって？」
「攻撃よ攻撃！」
「いいの？明らかに野性ポケモンじゃないけど？」
「こいつらは例外！いいから早く！」
「わ、分かった！」

それを合図に、テナーはダンプに、エリスはリックに向き直った。

「こっちからいくぜ！へへっ」

リックは急降下し、エリスの肩を狙う。

「『翼で打つ』！！」

「ぐっ！」

避けきれず、エリスはまともに攻撃を食らってしまった。思わず口から呻き声が漏れる。

「で、『電気ショック』！」

それでも、何とか攻撃を仕掛けようとするが、リックは楽々とかわしてしまう。

「どうした？もっと本気出せよ」

――早い！

エリスはまだ技を出すのに慣れていない為に、イメージしてから実際に技が発動するのに時間がかかる。その上、リックはすばしこいのが特徴であるズバット。避けるのはお手の物だ。

――どうしよう？

「『毒ガス』！！」

一方、ダンプと戦うテナーも苦戦を強いられていた。

――さっきからこればっかり。少しは違う技も出そうとか思わないのかしら？

口元を手で覆い、伏せた状態でガスをやり過ごしながらテナーは手元の石礫を投げ付ける。

「ケッ。当たるかよこんなもの」

――『バブル光線』を使えれば、こんな奴一撃で倒せるのに・・・

口元を覆っている以上、『バブル光線』は使えない。かと言って、今手を離せば間違いなく毒ガスの餌食になる。

――チャンスは、確実に近付いてる。今できるのは・・・耐えること！

そう言い聞かせながら、更に石礫を放った。
「これで終わりだ。『噛み付く』！」
エリスの攻撃が止むのを待って、リックは再度エリスに近付いた。
――攻撃しないと！
とっさにイメージを駆使し、体に電気をためるが、技として出す前に、リックは肩にすでに近付いていた。
――間に合わない！！
身を縮め、とりあえず少しでもダメージを受けないようにしようとしたその時、
『バチッ』
「ぐあっ！」
突然リックが断末魔の叫び声をあげ、地面に墜落した。
「え？」
エリスは地上でもがくリックを呆然と眺めていた。
エリスの特性は『静電気』。本来は体に触れたポケモンを一定の確率で麻痺状態にするという特性だが、電気をためていたところでリックが体に触れた為、麻痺では済まず電気がリックに流れ込んだという訳だが、もちろんエリスは理解していない。

「早く攻撃しろよ。お嬢ちゃん」
何回目かの『毒ガス』攻撃の後、勝ち誇ったようにダンプが言った。
「そうね。もうそろそろいいかしら？」
テナーが起き上がり、手を口からのけた。
「もらった！『毒ガス』！」
ダンプが高らかに技の名前を宣言した。
が、何も起こらない。
「しまった！技を使い切った！」
「気付くのが遅い。『バブル光線』」
慌てふためくダンプに、容赦なく青い泡が叩き込まれた。

シーン5　対決（後書き）

次でようやく第一章終了です！

シーン6　結成

テナーが『バブル光線』を放った後、勝負はあっけなくついた。
「イテテテ・・・や、やられた・・・」
「負けた・・・こんな奴等に・・・」
地面に転がるリックとダンプの前に、テナーは仁王立ちになる。冷ややかに二匹を睥睨し、あくまで落ち着いた調子で言った。
「返してもらいましょうか。あの石を」
「ちぇっ・・・」
リックはどこからか、模様の描かれた石を取り出しテナーに投げてよこした。
「ケッ、まぐれで勝ったからっていい気になるなよな！」
「お、覚えてろ！」
捨て台詞を残し、満身創痍のこそ泥達は奥へと消えていった。
「追いかけないと！」
二匹を追いかけようとするエリス。しかしテナーはそれを肩を掴んで止めた。
「痛っ！」
「私の目的は石を取り返すこと。奴等を捕まえることじゃないの。いい？」
「分かった！分かったから離して！」
テナーが手を離すと、エリスはその場に座り込んだ。
「痛い痛い・・・」
「もしかして、怪我してるの？」
「ちょっとね・・・」
よくみるとエリスの肩には、先ほどリックと戦ったときについた傷があった。
「これくらいの怪我なら大丈夫よ。痛むならこれでも食べておいたら？」

テナーは鞄から青い木の実を取り出した。
「これは？」
「『オレンの実』。ちょっとした怪我ならそれが一番効くわ」
――色々出てくるんだね。そのカバン
内心で感心しながらオレンの実を受け取り、目をつぶって口に放り込む。不思議な味が舌の上に広がり、心なしか痛みが和らいだ気がした。
ふとテナーのほうをみると、彼女は取り返した石を胸に抱き、安堵の表情を浮かべていた。その目には涙さえ浮かび、先ほどまでこそ泥達に睨みをきかせていたポケモンとは思えない程顔が変わっている。
「よかった・・・」
エリスの視線に気がつくと、テナーは慌てたようによそを向いてしまった。
「さ、出るわよ。ついて来て」
照れ隠しするように、テナーは足早に歩き始た。

エリス達が『海岸の洞窟』を出たときには、辺りは夕暮れのオレンジに染まっていた。
そして、その景色の中をいくつものシャボン玉――クラブの吹く泡が流れていく。
「きれーい！」
エリスは思わず歓声をあげた。
「天気のいい日の夕方は、クラブが泡を吹いてこんな風になるのよ。なかなか悪くないでしょう？それより・・・」
テナーは抱えていた石をそっと地面に置く。「お礼をいわないとね。あなたが協力してこそ泥達と戦ってくれたから、これを取り返せたもの」
実際のところ、エリスはなぜ自分が勝ったのかいまいち理解してい

ないのだが、
――まぁ、褒められて悪い気はしないからいいよね！
気にしないことにした。
「どういたしまして。ところで、それって何？相当大事なものみたいだけど」
「『遺跡の欠片』。まぁ、私がそう呼んでるだけなんだけど」
「へぇ～」
「ずっと昔、ある人からもらったの」
テナーは、夕日が沈みゆく海の向こうを見つめて目を細めた。
「この模様が何を意味しているのか、この欠片は何の為のものなのか・・・分からない。でも」
テナーの瞳は、真っ直ぐ欠片を見つめた。そこには、揺るぎない決意が秘められている。
「これだけは決めてるの。この欠片の謎は絶対に私が全部解いてみせるって」
「・・・そっか。叶うといいね、その夢」
エリスの声で我に帰ったのか、テナーは顔を少し赤らめながら欠片を鞄にしまった。そして、真面目な顔になって言う。
「エリスさんは、これからどうするの？」
「どうするって言われても・・・」
「元人間云々はともかくとして、あなたが記憶喪失なのは本当みたいね」
この時テナーの中で、ある一つの思いが動き始めていた。
「探検隊って知ってる？って言っても知ってる訳ないわよね」
「タンケンタイ？」
「さっきみたいな『不思議のダンジョン』に入って、色々な依頼をこなす人達のこと」
「その探検隊がどうかしたの？」
テナーがその続きを言うためには、いくらかの沈黙が必要だった。
「・・・探検隊、やらない？私と一緒に」

「えぇっ？それって・・・」
「非常識なのは分かってる。今日会ったばかりのあなたにこんなこと言うなんて」
目を合わせることができず、早口になってしまう。それでも、テナーは続けた。
「でも、あなたとなら一緒にやっていける、そんな気がするの。エリスさんの記憶も、探検隊をしていくうちに戻るかもしれないし・・・どう？」
「うーん・・・」
エリスはしばし考えた末、はっきりと言った。
「分かった。やってみるよ。探検隊ってやつ」
「本当に？」
「よろしくね。あと、私のことは『エリス』って呼んで。ていうか、テナーさんの名前まだ聞いてないね」
「『テナー』でいいわよ」
「そうじゃなくて、ほら名字だよ、名字」
「それ、言わないとだめなの？」
「当然♪チームになるんだから」
テナーはしばらくためらった後、ゆっくりと言った。
「マオシアン・・・テナー＝マオシアンよ」
かくて・・・
テナーとエリスの探検隊が結成された。
だが、この出会いが時と闇を巡る長くて短い物語の始まりの合図であることは、まだ誰も知らないのだった。

シーン6　結成（後書き）

作者「やれやれ。ようやく一段落ですな」
テナー「何が『やれやれ』よ。やや強引に話終わらせといて」
エリス「後半の話の展開めちゃめちゃ急だからね」
作者「気にしない気にしない♪」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2433z/

ポケダン伝〜時と闇を束ねる光〜

2011年12月19日00時47分発行